

人各、貴賤貧富の差ありと雖も、法性には固より、

へだては無い。隨て罪福亦固より主なし、迷海の苦
腦一度霽れて悟道の樂に達すれば、非人即公民、人
即佛である。御義に宣はずや『此の品の如來は理即
の凡夫なり』と、然らば吾等の行住坐臥は、即ち是
れ本佛の所作である。青苔に枕し、古塚に眠る、吾
にも、落花、月光、降雨、降雪、皆是れ『雨曼陀羅
華』ならざるものはない、朝に起きて谷川の水に身
を清め、終日唱題の修行をなし、夕には辻堂樹下に
端坐して、冥想にふける、吾が名をよぶ者もなければ、
吾が袖を引くものもない。天候貴人と雖も吾が
此の修行を得てなし得べきでない。見よ社會制裁の
窮屈なる中に在りて、名譽財産を誇りとする彼等の
はかなさを、又頼み難き、親戚、朋友、を頼みとし
變り易き地位を希ふを。

嗚呼笑ふべき浮世の者共かな。幸なるは吾身である
吾が身は是れ、大臣に非ず、軍人に非ず、商人に非
ず、農民に非ず、工夫に非ず、盜人に非ず、半身不
隨の乞食にして即ち三身具足の佛である。いでや今
宵は此所に坐して、よもすがら報恩の唱題をなさむ

南無妙法蓮華經。

偶 感

黒田 學 誠

世間に云ふ悲觀と樂觀の二者は、如何な原因に依て
起るものであらうか？ 其原因は慥に、世間的壓迫
と肉體的苦痛との二者を土台として、起るものに相
違ないのである、今日のやうな生存競争の烈しい世
の中に立て一度逆境に陥り諸事萬端交際の嘴と食ひ
違ひ、不治の病に罹るか、さもなくても永い間病床
に起臥してゐると、遂には悲觀に傾いて仕舞ふので
ある、之に反して、割合に世間的壓迫も肉體的苦痛
も受けない者は、多くは樂觀の方面に傾て行くので
ある。其結果二者は、如何なる成行きになるのであ
らうか、悲觀に陥つた者は、自分の身の分別がつか
なくなるので、遂々華嚴の瀧淺間の噴火口と、種々
難多な悲劇を演ずることに、なるのである。又樂觀
（有頂天を意味す）に傾て仕舞つた者は、遂には放
蕩墮落に身を持崩して、親の財産も世間の義理も、

一切棒に振つて仕舞つて、いつか箸も持たない乞食の様な境遇になつて仕舞ふのである。斯様な有様で一生を終つて仕舞ふのが、世の中の規則であると、取極めて仕舞ふことは、吾々宗教家の判断から行けば、二者共に大なる間違である、特に日蓮上人の主義から行けば、此の世中はそんな、つまらないものではない、『今本時、娑婆世界、離三穴、出ニル四劫、常住、淨土』と、仰せられた御言葉に依ても明かである。

法華經の中に『我此土安穩天人常充滿』と云ふ文があるが、此文に依て見ると、悲觀を起して此の世中を無理に去つて何の益があらうか、死木には花も咲かず實も結ばない。又『三界無安、猶如火宅』と云ふ文がある、此の文に依て見ると、樂觀を起して、無闇に快樂的行動を取り、前後も考へない、突飛な事をやると云ふ、此二者は、馬鹿なども、阿房なども云はなければならぬ。斯ふなつてみると、自分達は、どうしても眞面目に此の世中を、苦痛な事も堪へ、亦有頂天にもならず、何事も適度にやりそうして思ふやうに行かない行かない時は、それ迄

の運命と斷念で、人間たるの資格、宗教家たるの資格を飽まで失はないやうに、通り抜けなければならぬまいと、偶感ながら感ずるのである。

圖書室の窓より

鳴峰生

暖い初春の日射しがやわらかく南の障子に當る様になつた。僕は今迄讀んで居た『中央公論』を机上に伏せて目を窓外に晒した。

去年丁寮の君が裏の峰から抜いて來て植わした八ツ手が、さうやかなガーツンの中で小さい幹に大きな葉を遠慮なく延ばして來た。それを見下ろす如にスナナリと脊の高い南天が眞赤なルビーの玉を枝もたわよに稔らして居る。そこへ温い午后の日光が影を落して空氣は、淡く夢の如にふるへて居た。

隣へ腰掛けて一生懸命、早稲田文學の頁を繰つて居た野風君が突然こつちへ向いて「○君、君は田山花袋さんの『燈臺へ行く道』を讀みましたか」と云つた、僕は先の日曜に少し讀んだ事があるので『ね